

カント『判断力批判』における「自然目的」 —媒介問題としてのその意義—

久保志織（京都大学大学院文学研究科）

本発表の目的は、カント（Immanuel Kant, 1724-1804）の『判断力批判』（*Kritik der Urteilkraft*, 1790）第二部「目的論的判断力の批判」において、いかにして自然と自由との媒介の可能性が示されているのかを論究することである。カントは、『判断力批判』において、機械論的な自然法則に支配された自然の世界の存在者である私たちは、それにもかかわらずいかにして自由であり、それゆえ自由の法則に従った道徳的行為を行うことができるのかを問うた。『判断力批判』の特徴は、この問題が自然と自由との媒介の問題として問われることにある。『判断力批判』第二部においては、有機体の問題から義務の命法によってのみ証明され得る神の問題へと至ることによって、自然と自由との媒介の問題の解決が図られる。それゆえ媒介の問題とは、いかにして自然の領域から最終的に道徳の領域へと至ることができるのかという問題にほかならない。

カントは、『判断力批判』第二部において第一部「美感的判断力の批判」と同様に、自然において見出されるが機械的な自然法則によっては説明できないもの、つまり「自然目的」について論じている。自然目的とは、有機体と言い換えられるものであり、すなわち生物である。カントは、生物の構造のうちに、自然法則によっては捉えられない、つまり悟性によっては把握することができないものすなわち「理念」を見出した。しかし、それでは、いかにして私たちは有機体の把握において自然のうちに自然を超えたものを見出すのであろうか。この問いは、『判断力批判』第二部における媒介問題における肝である。なぜなら、私たちが具体的な自然を目の前にしたときに、いかにして自然を超えたものすなわち「理念」を見出すのかを明らかにすることができなければ、その後の神学に関する議論は成立しないからである。

自然目的を把握するさいに重要であるのは、部分の把握ではなく部分に先立つ全体の把握であるのだが、全体の把握の問題に関して、先行研究では理性の役割の重要性が指摘されてきた。そのなかで、全体としての自然の把握の問題に関して、『純粋理性批判』における自然の統一的理解との類似性が指摘される。確かに理念を形成するのは理性であるのだから、目的論的判断力における理性の働きは重要である。しかしそれでは、なぜカントは『純粋理性批判』における自然の統一的理解のほかに、『判断力批判』における自然目的を出発点とする全体としての自然の理解を提示する必要があるのであろうか。ここに、媒介問題を解決するための著作である『判断力批判』における「目的論的判断力の批判」の意味があるに違いない。本発表では、『純粋理性批判』と『判断力批判』における自然の統一的理解を比較し、そこにおける「全体」の把握の問題の取り扱い方の違いを検討することで、目的論的判断において私たちはいかにして自然のうちに理念を見出すのかを明らかにする。このことを通じて、自然と自由との媒介の問題における「目的論的判断力の批判」意味を提示したい。